公民館だより

中央公民館の利用者 一年間で約二万人

昨年一月から十二月までに中央公民館を利用した人は、一九、一〇〇人でした。これは横芝町全部の住民が一回半づつ利用したことになります。利用の状況を調べてみますと公民館の主催事業に参加された人が二六五回の開催で七、〇〇〇人と一番多く、つぎが役場、その他の会議、講習会等の利用が多く一八一回で五、七〇〇人の利用でした。また、最近は詩吟や民謡、生花などの趣味の研修グループの利用が多くなって来ており、二一五回の集合で二、六〇〇人の利用者がありました。そのほかは、団体または個人的な利用で三、八〇〇人となっております。このように非常に多くの方々に利用いただきましたがこれからも、公民館ではみんなに親しまれる公民館となるように努力をしておりますので、どうぞ気兼ねなくご利用をお願いいたします。なお、月別の利用状況は別表のとおりです。

昭和46年月別利用状況

月	利用回数	利用人員
1	29回	554人
2	73	1,950
3	86	2,088
4	66	1,296
5	50	1,246
6	67	2,148
7	66	1,392
8	53	1,029
9	52	1,017
10	102	2,397
11	82	2,581
12	57	1,464
計	783	19,162
一日平均	2.6回	65人

公民館の二月学級は次の日程により開催いたします。

学級名	日時	学習内容
婦人学級	2月 8日 午後1時30分から	「着物の着付」 着物を美しく着るための知識と技術を学びましょう。
子供会リーダー教室	2月13日 午前9時から	「わが郷土を知る」 ハイキングを兼ねて坂田城跡をたずねてわが町の歴史を学びましょう。
家庭教育学級	2月17日 午後1時30分から	「これからの家庭教育」 これからの家庭生活と家庭教育のあり方について考えてみましょう。
高令者学級	2月18日 午後1時30分から	「花づくりを楽しむために」 四季の花を楽しむために、草花、花木のつくり方と花だんのつくり方を学びましょう。

二十歳の誓い

成人文集 荒波から

内面的な大人に

伊藤正幸

二十になって知ったことーそれは、世の中の矛盾、そして、大人のきたなさである。まだ十代であった学生のころこんな世界とは知らず、ただ表面だけの大人にあこがれていた自分である。そのころの自分がなつかしいし、また、考え方がきれいだったし、夢も希望もあったような気がする。ところが、いざ、大人の住んでいる社会へ顔を出してみると、金さえあれば何でもできるし、また法律さえも裏通りというものがあることを知った。これを世の中の矛盾といわずに、何というのだろうか、政治の貧困というのか何というのだろうか、われわれが学校の先生に教わったことは、まるで違うではないか、ひねくれたような考え方だが、バカ正直に世の中を渡ったら、大損をするような気がする。現に、この生存競争の激しい世の中では、義侠心とか、人情とか、そんなものは不必要な気がする。まさに食うか食われるかだ、そんな世の中に、生きていく自信さえなくなったこともあった。でも、一旦、この世の中に生を受けた以上、男として生まれてきた以上この荒波を乗りこえていかねばならない。外面的な大人よりも、もっと内面的な大人になりたいと思うこれが、自分が二十才になって、日ごろ感じている実感であり抱負である。

「にげる」をすてる

平山道代

二十才を迎えた日から、「責任」というどっしりと重い荷物を持たされた。まだ、土台のできていない身体だけにその荷物は、見た目より非常に重い。ホラ、こんなに足がふらついている。重みに耐えながら、これではいかんと考え直す。一からやり直そう。そう感じた日から、私のほんとうの人生が展開された。ああもしたい、こうもしたい。いろいろ、自分なりの夢を抱く、そして、夢で終らせまいと四方八方研究する。どうもがいても、一人ではできないこともある。が、努力だけは他人の力ではどうにもならない。体力の限界はあるが、努力するということの限界はないと思う。だから夢が実現するまで、精いっぱいの努力をそそぎこもうと決意する。ところで、もう一度「成人」ということを改めて考えてみる文字どおり「成人」とは、「成り立った人間」のことを指摘していると私は思う。そう考えると、この世に真の成人を見つけることは、大変困難である。つまり、すべての人が、成人をよそおった未完成人間にすぎないからである。未完成人間が、完成された人間に一歩でも近づこうと努力している。こういう人を私は成人と呼びたい。だから、成人式を迎える今、いろいろな経験をへて完成された人間に少しでも早く近づきたいと思う。世の中のさまざまな出来事に対処できる人間になり「にげる」ということばをすてさり、どんな難題にも面と向って行けるような責任ある人になりたい。そしてくいのない新しい人生を送りたい。

編注　この作品については、特に横芝町青年団が、今年成人式を迎えられた皆様を祝福し成人文集を発行したもので、その中から紙面の都合で二名の方の作品を原文のまま掲載させていただきました。